



TITLE:

# [特別講演]ポレミスト・ベルナノスの の原点

AUTHOR(S):

天羽, 均

---

CITATION:

天羽, 均. [特別講演]ポレミスト・ベルナノスの原点. 仏文研究 2003, 34: 143-150

ISSUE DATE:

2003-09-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/137939>

RIGHT:

## ポレミスト・ベルナノスの原点

天 羽 均

本日は、大学院生の皆さんの研究発表のあとに、あまり学問的でない話をさせて頂くこととなりますが、これから取り上げますジョルジュ・ベルナノスの場合、バルザック、ブルースト、それにユルスナールといった先ほどの発表で取り上げられた作家のように、どの作品も読まれていて当然、といった前提で話を進めることはいささか難しいといった事情もあり、用意した作品のリストを元に、ベルナノスという作家の一側面を語ってみたいと思います。

私が学部でベルナノスを読み始めた頃は、作家が亡くなって（1948年）、10年ほどたったところで、同時代の作家でもありました。もちろん当時は現代文学といえばカミュ、サルトルであり、とくに主任教授であった伊吹武彦先生がサルトルの翻訳をされていたこともあり、学部の学生たち誰もが関心を持っていました。ところがベルナノスというのは、私は、大学にはいるまで全然知らなかった。どうして私がベルナノスを取り上げたかといえば、まだその研究は緒についたところで、作品も研究もこれなら何とか取り付けそうだという、ずるい魂胆でもあったのです。

そうして読んでいる間に、いくつか研究が発表され、テキストの校訂も進められていたのですが、これも、ブルーストなどの綿密なテキストクリティックとは異なり、ベルナノスがブラジルなどの南米にいた時期に出版されたものは、タイプミスはじめ、マニユスクリ云々以前の間違いだらけの状態で刊行されていたので、それを直すといった作業も少なくありませんでした。

日本ではその後も、広く読まれるということは、今日にいたるまであまりありません。小説家、ポレミストとしてのベルナノスの作品をあげたなかで、一般に知られる機会を持った作品といえば、*Journal d'un Curé de Campagne*『田舎司祭の日記』（1936）、*Sous le Soleil de Satan*『悪魔の陽の下に』（1926）、*Nouvelle Histoire de Mouchette*『新ムシェット物語』（1937）といった小説作品と、*Dialogues des Carmélites*『カルメル会修道女の対話』（1949死後刊行）、これは文字通りディアログ（台詞）、映画のシナリオのために書かれた作品ですが、この4作品が映画化されていることかと思います。映画に関心を持っておられる方は、おそらくご存じであろうかと思いますが、ロベール・ブレッソンが、かなり古くなりますが「田舎司祭の日記」（1951）を、またのちに *Mouchette* のタイトルで『新ムシェット物語』を映画化（1967）しています。とくに「ムシェット」の方は公開されたとき、私はバリーにいて見ました。『カルメル会修道女の対話』は、もともと、ドイツのゲルトルート・フォン・ル・フォールの作品『断頭台の最後の女』（1931）の映画化のシナリオのため依頼されて書かれたディアログで、ベルナノスの死の直前にできあがり、

死後アルベール・ベガンにより *Dialogues des Carmélites* のタイトルで出版されたもので、1960年に映画化され、若き日のジャンヌ・モローが出演しています。そして、つい最近亡くなった、モーリス・ピアラによって映画化された「悪魔の陽の下に」(1987) です。

とくに、ブレッソンによって映画化された2作品は、ブレッソンの初期の作品と、どちらかという晩年の作品という、かなり制作時期が離れているのですが、どちらもきわめてブレッソンらしい作品と言えます。「田舎司祭の日記」は、1960年代後半には、パリでもなかなか見る機会のない作品でしたが、今日では日本でもビデオが入手できるようになりました。これはもちろんブレッソンの作品としての評価からですが、ベルナノスとブレッソンの出会いは小説家にとっても非常にしあわせな出会いであったといえるでしょう。

『カルメル会修道女の対話』は、戯曲として上演されたほか、プーランクによってオペラに作曲されています。このオペラは、1998年にサイトウ・キネン・フェスティバル松本で小澤征爾によって上演されました。

刊行された順序としては最後の小説 *Un mauvais rêve* 『悪夢』(1950) は、作家の死後に出版されたものですが、これは、原稿が死後に見つかり、それを校訂したといった事情によるもので30年代の作品です。その前にあげてある *Monsieur Ouine* 『ウィーヌ氏』には1943と1946の二つの年代が入っていますが、43年はブラジルで出版され、46年はパリのブロン社からでた版です。リオで出版されたものはとくに原稿をタイプした人によるタイプミスや、タイプし忘れた原稿があるなど、不完全なもので、ブロン社のものにも多くの問題が残されていました。

ブレイアド版では3冊刊行されています。最初のが小説作品並びに『カルメル会修道女の対話』を収録し、1961年にでて、66年に改訂され、さらに大幅な改訂版が74年にでています。*Essais et écrits de combat* 『エッセーと論争の書』のタイトルで2冊、1971年と1995年に刊行されています。文学作品より論争の書の方がヴォリュームが多く、しかも1995年というきわめて最近刊行された点も注目してよいでしょう。本日のテーマとするボレミスト・ベルナノスは、こうした彼の活動に焦点を当ててみようというものです。エッセーというのも、いわゆるエッセーではなく、新聞、雑誌、講演などで発表され、彼が論集としてまとめた中に含まれなかったものを指していて、内容的には論争の書と同じです。私がリストに挙げた論争の書で、刊行年が2つあがっているものは、先ほどと同じ、南米とフランス国内で出版された版をあらわしています。また、彼の死後まとめられた論集、書簡などの方が生前に刊行されたものより量的には多くなっています。

こうした論争の書といった消耗度の激しい、時事的な文章が、死後も引き続き編集、出版されているところに、ボレミスト・ベルナノスに対する一つの評価が見られるのではないかと思います。私は、これまで小説作品を主に取り上げてきました。最初にいったように、ベルナノスの作品が日本であまり読まれない、という理由には、彼がカトリック作家であった、ということがあられるでしょう。現代のカトリック作家ということでは、よくフランソワ・モーリアックと並べあげられますが、日本ではモーリアックの方がずっと読者が多い。キリスト教作家ということでは、プロテスタントのジッドなども問題にされますが、モーリアックの『テレーズ・デスケルー』で、果たしてテレーズは救われるのかといったテーマが、文学的にも理解されやすく、また心理小説

として読まれている側面もあります。

ベルナノスの最初の小説『悪魔の陽の下に』が1926年ですから、ベルナノスの小説家としてのスタートはかなり遅く、彼はいわゆる「文学者」ではなかった。「悪魔」が真正面から登場するといったテーマから、彼の作品にはつねにマニ教的二元論が問題になるなど、日本の一般の読者にはどうも取つきにくい面があるのでしょう。日本で著作集を出版しているのが、春秋社であるといったことからこの辺の事情はおわかりいただけると思います。ポレミストであるということと、カトリック作家であるという、この2点が、日本においてベルナノスが多くの読者を得られない理由でもありましょう。私自身、ポレミックな問題とカトリックの問題は、これまでできるだけ避けてきた、というのが正直なところですよ。

ポレミスト・ベルナノスの問題は、現代史でいえば、第3共和政に根ざす問題です。ベルナノスは青年時代 *camelot du roi* であった。*camelot du roi* というのは、王党派 *Action française* の青年行動隊で、その一員として若い頃は街頭運動をして、何度もサンテ監獄に拘留されたりしていました。王党派右翼であり、基本的には反革命の立場でした。こうした政治的立場がとりわけ日本などで読者に抵抗を与えていたのだと思いますが、死後数十年を経てなお彼の時事的発言がまとめられるという事情を見れば、党派制を超えた彼の問題意識が今なお、注目されていると考えられます。そこで、今日は、そうしたポレミスト・ベルナノスの原点がどこにあるか、私なりにまとめてみたいと思います。

ベルナノスが小説を発表しだした1926年（『悪魔の陽の下に』）に続き、1927年 *L'Imposture* 『欺瞞』、28年 *La Joie* 『よろこび』という二部作があります。この『欺瞞』の方はまだ翻訳されていません。これはこの作品が非常にポレミックな内容を含んでいて、翻訳しようとするれば、当時の宗教界、知識人の世界をよく知らないといけないという事情があります。『よろこび』の方は、フェミナ賞をもらっています。そのすぐあとにポレミックな作品としては最初の *La Grande Peur des bien-pensants* (1931) を発表しています。これは *Edouard Drumont* と副題が付けられています。エドゥアール・ドリュモンは第3共和政とくにドレフュス事件などを専門にされる方はよく聞かれる名前だと思います。ジャーナリストであり、彼を有名にしたのは *La France juive* 『ユダヤのフランス』(1886) という作品で、これは近代アンティ・セミティズムの先駆けをなした本です。フランス現代史を専門とする *Michel Winock* も、彼に多くのページをさいており、ドリュモンを論じた *Edouard Drumont et Cie—antisémitisme et fascisme en France* 『エドゥアール・ドリュモン商会—フランスの反ユダヤ主義とファシズム』(1982) は主要部分が、彼の主著 *Nationalisme, antisémitisme et fascisme en France* 『フランスにおけるナショナリズム・反ユダヤ主義・ファシズム』(1982) に再録されています。

ドリュモンは一介のジャーナリストからこの『ユダヤのフランス』で一躍有名になりますが、その歴史的背景としては、19世紀末のパナマ事件、ドレフュス事件、その少し前にユニオン・ジェネラル銀行の倒産といった一連の出来事があります。第3共和政は、普法戦争での敗北、パリ・コミュヌの5月の虐殺を経て誕生したので、フランス革命以後の矛盾をはらんでいたと言えます。このときのドリュモンの主張のポイントは、ユダヤ人金融資本家によって *Vieille France*

「古き良きフランス」が崩れ去ってゆく、金権支配によって、l'honneurといった伝統的価値観が葬り去られることへの危機感を訴えることでした。パナマ事件のような政界を巻き込んだ疑獄事件では、資産家はとにかくとして非常に零細な投資をした庶民が大きな被害をこうむったということがあって、それを告発するにあたってアンティ・セミティズムということをしたので、フランスの現代のアンティ・セミティズムの一つの原型といわれているものです。

こうしたドリュモンに対するオマージュとして、彼の死後14年を経て書かれたのがベルナノスの *La Grande Peur des bien-pensants* です。bien-pensantsというのは、保守主義者とか伝統主義者を指すのですが、要するに、bien-pensantsですから、よく訳せば良識派といったところですが、これが一種の反語であることは、皆さんご承知の通りです。conformisteであり、conventionnelな人々を指す（ロベール）のです。余談ですが、春秋社の著作集では、「心正しき人」と訳されていて、これも思いっきりの反語ということでしょうかね。la grande peurというのは、そういった人々のおそれの種、タブーの的となっているエドゥアール・ドリュモンという存在をあらわしているのです。ドリュモンの名前を出すことだけで、反ユダヤ主義者であり、人種差別主義者といわれかねない恐れがあったわけで、ベルナノスはこうした風潮に挑戦したのです。

ドリュモンの『ユダヤのフランス』については先ほど紹介したヴィノックが書いていますが、最初は自費出版され、2年間で145版を重ねるベストセラーになっています。ドリュモンは1914年に亡くなりますが、それまでに200版を重ねています。そして、このジャーナリズムが盛んになる時代、ドレフュス事件では、ゾラがロロール紙のJ'accuse!などで、マスメディアにより世論に訴える時代の口火を切ったのが、ドリュモンが1892年に創刊した新聞 *La Libre Parole* であったのです。ラ・リーブル・パロール紙は、19世紀末から20世紀にかけてのフランスのジャーナリズムを語るときには必ず取り上げられるもので、『ユダヤのフランス』での考え方をもとにしたアンティ・セミティズムを標榜した新聞ですが、そのスローガンは *La France aux Français* 「フランスをフランス人の手に」というもので、これは今日のFNなどの主張と同じものですが、もちろん今日の移民の排除とは異なり、ユダヤ人金融資本家からフランスの伝統的な価値を取り戻せ、という主張であったわけです。

パナマ事件とか、ドレフュス事件は、まさにこのラ・リーブル・パロール紙によって火がつけられたといえます。パナマ事件では「パナマ事件の内幕」という連載記事で糾弾し、ドレフュス事件では、まだドレフュスの名前の出ない段階で、スパイ容疑で逮捕者がでたらしいということを知り、数日後にドレフュス大尉逮捕の第一報をしたのが、このラ・リーブル・パロール紙だったのです。ドレフュス事件では実際に大尉が逮捕されたのは1894年の年末ですが、ゾラがロロール紙にJ'accuse!を書いたのはほぼ3年後の1898年1月だったのです。こうして、今日のFNなどの運動に見られるポピュリズムの先駆けとなったと言えますし、ゾラの記事をきっかけにジャーナリズムを中心として、ドレフュス派・反ドレフュス派に分かれた知識人の運動がくり広げられるきっかけともなったのです。火付け役であったラ・リーブル・パロールは、皮肉なことに、そのために終焉を迎えることにもなり、1910年にはドリュモン自身新聞を手放しています。ドレフュス事件が知識人の注目を集めた時代に、*La Ligue antisémite de France* 「フランス反ユダヤ主

義同盟」と、これに対する La Ligue des droits de l'homme「人権同盟」ができ、それぞれ運動が展開されますが、右翼の反ユダヤ主義同盟は、やがてアクション・フランセーズに引き継がれてゆきます。

こうした歴史の流れの中で、ドリュモンが過去の人として読まれなくなった、あるいは触れることがタブーになった1931年に、ベルナノスがこの *La Grande Peur* を出したということ、しかもこれが彼のポレミストの活動としての出発点となったということ、これは、読者にとってはかなり悩ましい問題で、アンティ・セミティズムを避けて通れないということ、これをそれではどのように評価していくか、という問題を突きつけられるわけです。先ほど引いたヴィノックも『フランスにおけるナショナリズム・反ユダヤ主義・ファシズム』で「ベルナノスの場合」という一章をもうけていますが、かなりいいわけをしながら書いているようなところが見受けられます。ベルナノスとしては、王党派から出発して、しかも彼が戦後も読まれる最大の理由は、スペイン市民戦争で一般の予想を裏切って、カトリック教会を糾弾し、大戦中は南米からナチズムに対する抵抗を呼びかけたことにあります。

スペイン市民戦争では、ベルナノスは当時住んでいたマヨルカ島でこれに遭遇するのです。文学者のアンガジュマンの例として、ヘミングウェイ、マルローなどがこれに駆けつけたことが有名ですが、ベルナノスは1936年『田舎司祭の日記』でアカデミー小説賞をもらうのですが、依然として貧乏であり、また、根っからの文学者（リテレール）ではなく、パリには住まず、トゥーロンなどにいたのですが、それでも家賃が払えないなどの経済上の理由で1934年に一家でマヨルカ島にうつり、パルマに住んでいたのです。そこで彼は市民戦争に巻き込まれたのです。最初は息子もフランコのファランヘ党に参加するなど、彼は教会の立場を擁護すると考えられていたのです。しかしベルナノスは、パルマでの教会も加担した虐殺を目の当たりにし、司教を告発する文を書き始め、さらにはフランコ派を糾弾する文章を書いたのが *Les Grands Cimetières sous la lune*『月下の大墓地』（1938）になるのですが、これは、ある人々にとっては予想外のことだったのです。

ベルナノスの王党派としての立場、反ユダヤ主義は、一つの党派性をあらわすものではなかったのです。反ユダヤ主義については、キリスト教的な反ユダヤ主義、これは伝統的な宗教的対立に基づくもの、民衆的反資本主義、これが19世紀末に見られるもの、そして近代的人種差別主義、ヒトラーのショアにつながる反ユダヤ主義、の3つの立場があります。ドリュモンは、民衆的反資本主義の立場に分類されています。ベルナノスの場合も第3共和政のうさんくささ、その根っこに第3共和政がパリ・コミューヌの圧殺によって誕生した政体であるという認識があります。これはドリュモンも同じですが、その圧殺を許した教会、それによって生じた負の遺産を精算しないでいる第3共和政といったものに対する不満が当然あるわけで、それが反資本主義に結びつく。そこでは社会主義的な視点と通底するところがあるわけです。だから、ドリュモンについても、社会主義運動の流れとしてとらえられるときもあるぐらいで、ロトシルト家、レナック男爵、ヘルツ博士などの暗躍に対する憤りと、金融資本家に対し「働かざるもの食うべからず」といったきわめて素朴な視点がポピュリズムに根ざす反ユダヤ主義だったのです。

ベルナノスの立場は非常にアナクロニクなもので、王党派という、これは反革命・王党派といっても、もちろん政治的な反革命運動とか、あるいは王政を復活させるといった意図はなかったわけで、まさに一つのモラルであったのです。それは、パリ・コミューンの圧殺に対する反発や、自己の立場をsoldat兵士であるとし、それはつねに社会から裏切られる存在である、という思いがあったわけです。ベルナノス自身の経験からいえば、第1次大戦に、かなりの歳で従軍し、塹壕生活を送り、負傷して戻ってきました。

フランスは戦勝国として、20年代のles années follesを迎え、社会は享楽を求め狂奔している。これはベルナノスにとっては前線で戦った兵士への社会の裏切りとうつります。彼はl'esprit de l'avantとl'esprit de l'arrièreということをよく言います。l'avantは前線であり、l'arrièreは後方、銃後ということですが、前線で身を挺して戦った兵士が帰ってみると、後方でぬくぬくとしていた連中は、兵士の払った犠牲のことを全く考えていない。そしてles années follesで浮かれています。それはアメリカにおけるベトナム帰還兵の後遺症と全く同じ図式といえましょう。そうした意味でベルナノスは文学者でないと申しましたが、クラスとして知識人階級にも属していなかった、スペインでの経験も、全く一市民としてのものとしてのものだったのです。

ベルナノスが*La Grande Peur*でオマージュを捧げたドリユモンは*La France juive*や、ラ・リーブル・パロール紙で非常に多くの読者を獲得したのですが、ドリユモン自身運動の組織者ではなかった。たとえばアクション・フランセーズのシャルル・モラスは、ヴィシー政権のスポークスマンになったりしたのですが、そうしたことはなかった。ベルナノスはそうしたアンティ・セミティズムの元凶とされるドリユモンの本当に言いたかったことは何か、を訴えたかった。それは、このときベルナノスが言いたかったことでもあったのです。ベルナノス自身は、カトリックとして、教会の組織をまったく認めなかったのも、それは『田舎司祭の日記』のアンブリクールの教区の描写もそうですし、同じ時期に書かれながら、発表されるのは生前最後になる『ウィーヌ氏』、これはもともと*Paroisse morte*『死せる教区』というタイトルで考えられていたのです。先ほど言った兵士soldatの役割が、司祭という教会の最末端、組織としては最末端の兵士とパラレルに考えられているのです。司祭がいちばん教区民とのつながりを持っている。しかし、20世紀すなわち現代世界は*paroisse morte*なのだ、つまり教区が機能しなくなった、生きる場がなくなった世界なのだ、という、ベルナノスの小説世界は、基本的にはそういう問題を根本に抱えているわけです。

ベルナノスは、リテレールではないのですが、小説を書くことはもちろん嫌いではなかった。なのに彼は書けなくなった。最後の小説として『ウィーヌ氏』を書き終えたのは1940年で、フランスがドイツに降伏する直前ですが、「死せる教区」の意味を考えると、彼自身にとって小説の世界の場がなくなったということ象徴的にあらわしています。彼は一度フランスに戻っていたのですが1938年7月、ミュンヘン協定前夜にバラグアイに向けてフランスを離れます。ミュンヘン協定を結ぼうとしているフランスに絶望した、と言ってもいいのですが、実際には経済的に困っていたのです。ブラジルに着き、最初に行ったバラグアイに失望し、ブラジルに戻り、各地で農園の経営を試みたのちリオ・デ・ジャネイロの北方バルバセナに小農園を買い落ち着きます。

こうしたノマド的な生活の中でも、フランスに向けて書き続けるわけです。これがスペインの市民戦争から始まったポレミックな作品のベースになっています。

レジスタンス運動は、フランスの敗戦直後から始まったわけではなくて、共産党などが立ち上がってからはじめてレジスタンスとして動き始めたのですが、その間にもベルナノスは南米から書き続けていたわけです。終戦後、ちょうどこの5月8日が、58年目のアルミスティス（休戦記念日）でしたが、ドゴール將軍から再三、要請を受けて、帰国するのですが、フランスのレジスタンス運動との間にもいろいろな問題が生じます。ベルナノスがフランスのレジスタンスを含め、これまでと同じように舌鋒をゆるめずに告発すればするほど、その場にいなかった者が何を言うか、といった反発が生じますし、また、レジスタンスが解放ののちの美酒に酔っていた時代の終焉は早く、ドゴール自身の進退にも見られるように、レジスタンス運動の神話化のなかで、戦後を巡る主導権争いがくり広げられるのを目の当たりにすることになります。その後、時を経てレジスタンスの検証、さかのぼってヴィシー政権時代の検証が行われるようになり、ベルナノスの発言が、今日まで聞かれてきたのです。

ベルナノスの場合は、ドリュモン以上に、党派、組織といったものと無縁の作家であり、「作家」という表現が、小説を書けなくなった、というのは私の解釈なのですが、言い換えれば小説を書かなくなった人間にふさわしくないとしても「書く人」という意味での *écrivain* であり続けました。組織、権力のうさんくささを、一介の *écrivain* として告発し続けたその原点に、ポレミスト・ドリュモンがいたのです。

このことは、エドゥアール・ドリュモンという人物について、知らないとなかなか手が出せなかった問題でもありました。私自身、ベルナノスだけを読んでもわかりにくいところで、長い間敬遠していたのですが、ちょうど私のおりました研究科（大阪府立大学人間文化科学研究科）で、エドゥアール・ドリュモンのラ・リーブル・パロール紙を研究論文にして今年学位を取られた方がおられ、しばらく一緒に勉強させてもらったことでドリュモンのことも少し見えてきたのです。

ドリュモンのアンティ・セミティズムの幻影に、おびえていたわけしり顔の連中 *bien-pensants* たちに、ドリュモンの言いたかったことを問い直し、明らかにすることで、ベルナノスの終わることのない孤独な戦いが始まったと言えるでしょう。今日でもラシズムとしてのアンティ・セミティズムは、もちろん許されませんが、アラブ世界との対立の中でのイスラエルの問題、アメリカの政権とイスラエル・ロビーの問題、イラク戦争の問題などすべてつながってくるだろうと思います。

フランスで今日ベルナノスが読まれるとすれば、グローバリゼーション、フランス語で言えば *mondialisation* に対して、G8などの機会に見られる *altermondialisation*、今日推し進められているのとは異なった *mondialisation* を要求する運動が、新聞などでしょっちゅう取り上げられていますが、それは、つねに、権力の周囲で利益を得ようとする、政治家、大企業（かつての金融資本家も含み）の営為がわれわれの周囲にいつそう巧妙なかたちで、むしろ増大して行く状況のなかで、彼の *essais et écrits de combat* が死後50年を経てメッセージを送り続けているからではない



ボレミスト・ベルナノスの原点

でしょうか。

本稿は、京都大学フランス語学フランス文学研究会総会（2003年5月10日）の講演を記録したものです。講演では、口頭ではわかりにくいいためベルナノスの著作リストを用意しましたが、本稿ではできるだけ原題、翻訳、出版年代などを補い、リストは省略しました。その他若干舌足らずであったところ、明らかに間違っていた箇所など最小限に補筆しました。